

## (2) 長野県佐久市（岩村田本町商店街）

長野県佐久市岩村田は中山道 22 番目の宿場町として古くから栄えた商業の街。避暑地で有名な軽井沢の約 15 キロ南西に立地。佐久市は平成の大合併で人口 5,6000 人から 100,000 人の都市となったが、岩村田の商圈としては周辺に 30,000 人を抱える中心市街地。

平成 10 年長野五輪開催に伴うインフラ整備（新幹線開業、高速道路佐久 IC 開業）に伴い、大型集積が到来。イオンとカインズで売り場面積占有率の 90%を占める規模。佐久平駅前周辺にはナショナルチェーンが林立する都市型商店街が岩村田商店街の西 800mに形成され、岩村田商店街は大打撃を受けた。

そこで危機感を持った青年会が、中心となって振興組合を結成(平均年齢 36.7 歳)。イベントこそ、活性化の近道と考え、「日本一イベント」を毎年実施。毎回 2,000～3,000 名を集客。しかし、イベントは打ち上げ花火であり、人は集まっても商店街にお金は落ちていない。そこでイベントを取りやめた。

そこで取り組んだのが確立した理念の設定。具体的には

1. 地域密着顧客創造型商店街（ターゲットと生存領域の明確化）
2. 「ともに働く、暮らす、生きる商店街」の構築（事業基準）

とした。平成 12 年には、42 店舗中 15 の空き店舗があり、平成 13 年以降、以下のような空き店舗対策に着手することにした。

### ・ コミュニティスペース「おいでなん処」の設置

平成 14 年、土蔵づくりの建物を改装。地域コミュニティの拠点にした。  
(年間 6,000 人以上の利用実績)

### ・ コミュニティビジネスの開始 (収益事業を自らの手で)

平成 15 年「本町おかず市場」開業（ピーク時は年間 2,400 万円の売上、利益も確保）

### ・ インキュベーターの育成 「本町手仕事村」設置

平成 16 年、2.5 坪 15000 円の月額家賃で起業家を募集。軌道に乗れば他の空き店舗へ移転させ、空き店舗を解消させる仕組を構築。5 店舗の空き店舗を解消

### ・ 平成 18 年度「お助け村」（子育て世帯を対象とした商店街会員制度）を開村

年間 13～15 の子育て小イベント（20 名から 400 名）を実施。子育て世代の会員制度発足。



- ・平成20年全国初商店街直営学習塾「岩村田寺子屋塾」開設  
地域で子供を見守る教育 学習支援を商店街で。現在は、不登校生や発達障害を持つ子も受け入れる通信制高校併設
- ・平成22年 託児所の開設（「子育てお助け村」 子育て相談を年配の保育士に）
- ・平成22年「佐久っ子ワオンカード」事業開始  
イオンとの提携 「地域電子マネー」構想
- ・若手育成研修事業 本町商人塾・岩村田商人塾・起業家育成塾開講
- ・平成23年、高校生チャレンジショップ開設（高校との商学連携）  
若い世代を商店街に巻き揉むことに成功
- ・地域ブランド創生事業「三月九日 青春食堂」  
地元農業高校と連携してメニュー開発（カレーうどん）



平成12年度の組合加盟店42店舗中15店舗の空き店舗であったのが、現在、61店舗中2店舗まで減少した。さらに、歩行者通行量も平成21年度は120名/日であったものが平成24年度には200名/日まで増加している。

これからの商店街に必要なこととして、以下のポイントを意識している。

1. 若手の人材育成
2. 店主の高齢化に伴う起業家との連携  
後継者がいなければ、外から連れてきて起業インキュベーターの育成システム
3. 各種団体との連携（大学、NPO, 若手農業経営者、若手起業家、まちづくり会社など）
4. 組織力のある商店街（組織力がないと実行力がない）
5. ビジョンを持ち、自分たちで事業計画のできる商店街（自分たちの街は自分たちでビジョンを描け。そして自分たちの力で事業推進を）
6. 行政が街づくりの支援に理解力を持っていること（「街づくり」を真剣に考える担当者か否か、によって温度差がありすぎる現実を痛感。中央は、地方への巡視を、中央と地方との人材交流をして、地方の人材力のアップを）